

# 自閉的特性のある夫を持つ妻と一般既婚女性の結婚生活満足感に影響を与える要因の比較・検討

水谷 美登里 お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科

## 要約

父親に自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder；以下“ASD”と言う）の特性がある場合、表面的には社会生活上支障がないように見えていても、わが子や妻の気持ちが理解できず、子どもの学校のトラブルや母親のうつ状態の原因になっていることがある（宮尾，2012）。本研究では、このような問題を二重 ABCX モデル（McCubbin et al., 1983）の「家族の危機」と捉え、自閉的特性のある夫を持つ妻 82 人（臨床群）と定型発達の夫を持つ妻 112 人（対照群）を対象とし、結婚生活満足感に影響を与える要因の比較・検討を行うための質問紙調査を行った。重回帰分析の結果、夫の自閉的特性の高い臨床高群では、夫の支援性と力動性、および妻の結合予期の 3 つの要因が、妻の結婚生活満足感に正の影響を与えていることが示された。また、対象者の属性データや各要因の分析の結果、臨床高群では、夫の自閉的特性は「家族の危機」につながるストレッサー、夫の支援性と力動性は「家族の資源」、妻の結合予期と結婚生活満足感はストレッサーに対する妻の「認知の仕方や意味付け」、家族の構成員が疲弊してしまい別居などの家族の存続が危ぶまれる状態が「家族の危機」であることが示唆された。「家族の危機」を回避するためには、教育・社会・心理・医療の密接なネットワークを構築し、全ての家族の構成員をサポートしていくことが求められる。

**キー・ワード：** ASD 二重 ABCX モデル 家族の危機 自閉的特性 夫 妻 結婚生活満足感

## I 問題と目的

### 1. はじめに

ASD は、社会的コミュニケーション及び対人相互反応における持続的な欠陥、および行動、興味、または活動の限定された反復的な様式に特徴づけられる発達障害の一つである（DSM-5, 2013）。ASD は知的水準と無関係に現れ、大部分は正常範囲の知能の人々にみられる（神尾，2012）。ASD の成人のうち、比較的高学歴で一般企業に就職しているケース群の約 10% が既婚者であるとされる（Yukawa et al., 2012）。近年、精神科を受診

する成人患者の中で ASD と診断されるケースが増えているが、一見自閉的に見えない高学歴の成人患者の対応に医療現場でも苦慮することが多いとされる（神尾，2012）。

父親に自閉的特性がある場合、表面的には社会生活上支障がないように見えていても、家庭内でわが子や妻の気持ちが理解できず、子どもの学校でのトラブルや母親のうつ状態などの主な原因となっている場合があり、家族機能の問題として捉え、当事者のみならず家族へのサポートも重要となる（宮尾，2012）。最近、こうした問題に直面

する妻の苦悩がメディアなどで取り上げられるようになった(新井, 2017)。父親に自閉的性質がある場合, 妻は, 母としての役割と当事者である夫をサポートする2つの役割を担うことになる。妻の心身の健康の維持は, 家族全員の心理社会的問題と関わる重要な問題となっている。

## 2. 家族の危機

「家族の危機」とは, 家族がそれまでの生活様式では対処できないような事態に直面し, その対応に失敗すれば, 家族の存続が困難となるような状態を指す(森岡ら, 1983)。Hill (1958) は, 同じ出来事でも家族によって危機に陥る程度に差があることに注目し, 家族にとってストレスとなる出来事(a)は, 家族の危機対応資源(b)と相互作用するとともに, 家族のその出来事に対する認知の仕方や意味付け(c)とも相互作用して, 危機(X)につながるとするABCXモデルを示した。

McCubbin et al. (1983) は, ひとつの危機が発生して終わりということではなく, 危機の経験後に新たな状態へと遷移するとし, Hill (1958) のABCXモデルに時間と累積の概念を導入した二重ABCXモデル(図1)を提唱した。

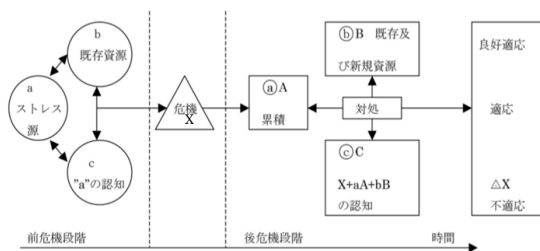


図1 二重ABCXモデル  
新しい家族社会学 四訂版, p. 83, 培風館, 1997 より一部改変。

## 3. ASDのある成人の結婚とその家族の問題に関する研究

Renty et al. (2006) は, 21組の子どものいるASDのある成人とその配偶者を対象とし, 結婚生

活でASDの配偶者を持つ妻や夫が感じている不適応感や結婚生活満足感に影響を与える要因を検討した。その結果, 夫のASDは, 妻の結婚生活満足感を低下させ, 不適応感を高める要因であり, その一方で, ASDのある夫から妻への支援は, 妻の結婚生活満足感を高め不適応感を低下させる要因であることを報告した(Renty et al., 2007)。

結婚は, 成人の心理的適応に影響を及ぼす重要な要因であり, 既婚者にとって結婚生活の質や夫婦関係の質がその適応を左右する(伊藤ら, 2004)。また, 配偶者からの情緒的サポートは, 既婚者の疎外感を低減する(伊藤ら, 1999)。特に, 夫から妻への情緒的サポートは, 妻のディストレスの低減に直接作用するという報告もある(稲葉, 1999)。海外での研究においても, 夫から妻への情緒的サポートは, 妻の夫婦関係満足度を高め, バーンアウト傾向を低下させる役割を果たすという報告がある(Erickson, 1993)。

Lau et al. (2011) は, ASDの既婚者とその家族を対象とし, 夫婦・子どもの3人にASDがある場合, 親のどちらか一方と子どもの2人にASDがある場合, 親のどちらか一方だけにASDがある場合の3群を設定し, 結婚生活満足感の検討を行った。3群の中では, 親のどちらか一方だけにASDがある群の結婚生活満足感が有意に低いことを報告した。

甘露寺(2012)は, 定型発達の方とASDの妻のグループ, ASDがある方と定型発達の妻のグループ, 定型発達同士の夫婦のグループの3群の夫婦関係満足度を比較し, 夫にASDがある場合に妻の夫婦関係満足度が有意に低い値を示したと報告した。

ASDのある成人の結婚に関する先行研究の結果をHill (1958)のABCXモデルに当てはめると, 夫のASDは「家族の危機」につながるストレス(a), 夫から妻への支援は家族の危機対応資源(b), 妻の結婚生活満足度はストレスに対する認知の仕方や意味付け(c), そして妻の

不適応は家族の危機(X)に当たると考えられる。

#### 4. 結婚生活満足感に影響を与える個人特性に関する研究

Renty et al. (2007) が報告した「家族の危機」に対応する資源としての夫からの支援の他に、どのような要因が考えられるだろうか。また、妻のストレスに対する認知の仕方や意味付けとしてはどのような要因が考えられるだろうか。本研究では、一般の既婚者の結婚に関する研究で扱われてきた要因の中から、妻が夫に期待する役割行動遂行、妻の愛着スタイル、そして妻の関係楽観性と関係効力感を取り上げる。

##### 1) 妻が夫に期待する役割行動遂行

対人関係の親密化に伴い当事者間の相互依存レベルが高まるが、相手に対して自らの行為の及ぼす影響力が増していくにしたがい葛藤の生起可能性も高くなる (Braiker et al., 1979)。下斗米 (2000) は、親密化の段階が上がるにつれ、相手に期待する役割行動の内、支援性、近接性、娯楽性、力動性に対する期待度が総じて上がると報告した。以上より、本研究では、妻が夫に期待する役割行動遂行を家族の資源となる要因と想定する。

##### 2) 愛着スタイル

成人の愛着スタイルは、親密な異性との関係について高い予測性を持ち結婚生活の質に影響を与える重要なバロメータである (Fraley et al., 2000)。特に、安定型の愛着スタイルは、結婚生活の満足度と正の相関があるとされる (Feeney, 1990)。以上より、本研究では、妻の愛着スタイルを「家族の危機」につながるストレスに対する妻の認知の仕方や意味付けと想定する。

##### 3) 関係楽観性と関係効力感

本来不完全なものである対人関係において、パートナーと良好な関係を築き、パートナーとの関係に満足することが出来る人たちには、元々、楽観主義的な傾向が備わっていると考えられている (浅野, 2009)。本研究では、妻の関係楽観性と

関係効力感もまた、「家族の危機」につながるストレスに対する妻の認知の仕方や意味付けと想定する。

#### 5. 本研究の目的

本研究では、McCubbin et al. (1983) の二重ABCXモデルを枠組みとし、結婚生活の時間の経過と妻にとってストレスとなる出来事の累積により、妻がそれまでの生活様式では対処できないような事態に陥ることを「家族の危機」と捉える。また、妻が夫に期待する役割行動の遂行を家族の危機に対応するための資源、妻のパーソナリティ特性である成人愛着スタイル、関係楽観性、および関係効力感をストレスに対する認知の仕方と意味付けと想定する。そして、それらの要因の中から妻の結婚生活満足感に影響を与えている要因を探索的に検討することを目的とする。

なお、このモデルを用いるのは、家族の危機を家族の責任に帰するためではない。自閉的特性のある夫を持つ妻たちに共通する心理・社会的問題の本質やパーソナリティ特性、不適応発生機序を明らかにし、支援の対象となりにくい妻のウェルビーイングを高める支援方法を検討するためである。

## II 方法

### 1. 調査対象者

調査対象者は自閉的特性のある夫を持つ妻、および定型発達に夫を持つ妻とした。

### 2. 調査時期

2015年10月下旬～11月下旬に実施した。

### 3. 調査手続き

#### 1) 臨床群の抽出

自閉的特性のある夫を持つ妻のための複数の自助会の主宰者に連絡し、質問紙調査への協力依頼を行った。7団体の主宰者から調査協力への同意

を得て、その内5団体の主宰者からは調査者が自助会のイベントに参加し、参加者に直接調査依頼を行う許可を得た。参加者に調査主旨と倫理的配慮について説明の上、調査協力依頼を行い、自分の意志で質問紙票を受けとってくれた82人を臨床群の調査対象者とした。

## 2) 対照群の抽出

調査者の知人の既婚女性とその知人を介して調査協力を依頼し自分の意志で質問紙票を受け取ってくれた一般の既婚女性112人を調査対象者とした。

## 3) 手続き

質問紙調査を実施した。質問紙票への回答は自宅とし、回答後当該質問紙票を同封の返信用封筒に入れ無記名で返送してもらった。研究協力者には質問紙票配布時に、薄謝として500円分の図書券をお渡しした。

## 4. 倫理的配慮

調査実施においては、研究主旨、調査倫理に係る注意事項、匿名性を明記した質問紙票への回答をもって協力への同意とし、調査で得られたデータは厳重に管理した。本研究は、お茶の水女子大学人文社会研究の倫理審査委員会の承認を得た(受付番号215-70)。

## 5. 分析方法

データを統計的に処理するため、分析にはIBM SPSS 23を使用した。

## 6. 調査内容

本調査で使用した質問紙票では、回答者と家族の年齢、職業などを問うフェイスシートに加え、以下に示す6つの尺度を使用した。

### 1) フェイスシート

回答者と家族の年齢、最終学歴、就業形態、結婚年数、夫と知り合ったきっかけ、夫の転職の有

無、夫の診断の有無・経緯について回答を求めた。

### 2) 内的作業モデル尺度

内的作業モデル尺度(戸田, 1988)は、成人の愛着パターンを評価するための尺度である。3つの下位尺度18項目により構成されている。6件法で回答を求めた。

### 3) 役割行動遂行尺度

役割行動遂行尺度(下斗米, 2000)は、親密な関係の相手に期待する役割行動に対する遂行度への満足・不満足度を測定する尺度であり、支援性、近接性、自律性、娛樂性、類似性、力動性の6つの下位尺度33項目により構成されている。本研究の調査対象者は既婚者であるため、友人関係や恋愛関係において使用される近接性を除外し、5つの下位尺度29項目を使用した。9件法で回答を求めた。

### 4) 関係効力感尺度

関係効力感尺度は、Murray & Holmes (1997)が作成した“The Relational Efficacy Scale”を浅野(2009)が邦訳した尺度であり、9項目から成る。5件法で回答を求めた。得点が高いほど夫婦の関係についてよりコントロール出来ていると感じていることを示す。

### 5) 関係楽観性尺度

関係楽観性尺度は、Murray et al. (1997)が作成した“The Relational Optimism Scale”を浅野(2009)が邦訳した尺度であり、結合予期と分離予期の2つの下位尺度10項目から成る。既婚者を対象とする本研究では、「結婚することになるだろう」という項目を除外し9項目のみ使用した。5件法で回答を求めた。

### 6) 成人自閉症スペクトラム障害のスクリーニング質問票

調査対象者の夫に、直接自閉的特性の有無を問うことは困難と考えられたため、家族によるスクリーニング質問票として作成されたNylander et al. (2001)の成人自閉症スペクトラム障害のスクリーニング質問票(The Autism Spectrum

Disorder in Adults Screening Questionnaires; 以下“ASDASQ”と言う)を使用した。10項目について「はい」「いいえ」で回答を求めた。カットオフポイントは6点である。

### 7) 婚生活満足感尺度

Lock et al. (1959) の結婚生活満足感尺度 (Short Marital-Adjustment Scale ; 以下“SMAT”と言う) は15項目から成る。回答方法が項目により異なり項目ごとに重みづけが指定されている。

## III 結果

### 1. 分析対象

質問紙票の配布数, 回答者数, 回収率, 除外数, 有効回答数を表1に示す。臨床群ではSMATとフェイスシートの項目に回答もれがあった3人を除外し79人を分析対象とした。対照群ではSMATに回答のなかった1人を除外し103人を分析対象とした。全体では182人を分析対象とした。

表1 配布数, 回答者数, 回収率, 除外数, 有効回答数

	臨床群	対照群	全体
配布数	82	112	194
回答者数	82	104	185
回収率(%)	100.0	92.9	85.6
除外数	3	1	4
有効回答数	79	103	182

### 2. 分析対象者の概要

フェイスシートから得られた妻と夫の概要を表2に示す。各項目について、臨床群と対照群の2群について $\chi^2$ 検定を行った。有意差が認められた項目は、別居 ( $\chi^2=6.25$ ,  $p<.05$ ), 夫と知り合った場所 ( $\chi^2=16.59$ ,  $p<.001$ ), 妻の就業形態 ( $\chi^2=20.81$ ,  $p<.001$ ), 夫の診断 ( $\chi^2=13.63$ ,  $p<.001$ ) であった。以下, 有意差があった項目について記述する。

臨床群79人の夫の内13名(16.5%)が医師により発達障害や精神疾患の診断を受けており, そ

表2 臨床群と対照群の妻と夫の概要

	臨床群(N=79)		対照群(N=103)		$\chi^2$ 検定
	妻 人数 (%)	夫 人数 (%)	妻 人数 (%)	夫 人数 (%)	
年齢					
20代	2 (2.5)	2 (2.5)	—	—	
30代	8 (10.1)	5 (6.3)	22 (21.4)	19 (18.4)	
40代	26 (32.9)	26 (32.9)	21 (20.4)	19 (18.4)	
50代	36 (45.6)	32 (40.5)	44 (42.7)	30 (29.1)	
60代	7 (8.9)	14 (17.7)	16 (15.5)	35 (34.0)	
結婚年数					
10年未満	15 (19.0)		20 (19.4)		
10～19年	23 (29.1)		21 (20.4)		
20～29年	27 (34.2)		25 (24.3)		
30～39年	14 (17.7)		35 (34.0)		
40年以上	0	—	2 (1.9)		
家族構成					
子どもの数	1.7	—	1.8	—	別居
別居	10 (12.7)		2 (1.9)		$\chi^2=6.25^*$
恋愛結婚	66 (83.5)		91 (88.3)		
お見合い	13 (16.5)		12 (11.7)		
知り合った場所					知り合った場所
職場	13 (16.5)		24 (23.3)		$\chi^2=16.59^{***}$
学校	3 (3.8)		23 (22.3)		
学校以外のサークル	13 (16.5)		9 (8.7)		
その他	37 (46.8)		35 (34.0)		
就業形態					妻の就業形態
正規社員・職員	10 (12.7)	48 (60.8)	25 (24.3)	68 (66.0)	$\chi^2=20.81^{***}$
契約社員・パート・嘱託	15 (19.0)	4 (5.1)	34 (33.0)	8 (7.8)	
派遣社員・請負	2 (2.5)	1 (1.3)	2 (1.9)	3 (2.9)	
学生	2 (2.5)	1 (1.3)	3 (2.9)	0 (0.0)	
事業経営	3 (3.8)	14 (17.7)	1 (1.0)	10 (9.7)	
家業手伝い	5 (6.3)	0 (0.0)	5 (4.9)	3 (2.9)	
フリーランス	4 (5.1)	1 (1.3)	7 (6.8)	1 (1.0)	
専業主婦	33 (41.8)	0 (0.0)	26 (25.2)	0 (0.0)	
無職	3 (3.8)	8 (10.1)	0 (0.0)	8 (7.8)	
その他	2 (2.5)	2 (2.5)	0 (0.0)	2 (1.9)	
最終学歴					
中学校卒	1 (1.3)	1 (1.3)	1 (1.0)	1 (1.0)	
高校卒	13 (16.5)	14 (17.7)	10 (9.7)	15 (14.6)	
高等専門学校卒	1 (1.3)	3 (3.8)	2 (1.9)	5 (4.9)	
短大卒	20 (25.3)	—	24 (23.3)	—	
大学卒	29 (36.7)	42 (53.2)	45 (43.7)	47 (45.6)	
大学院修了	8 (10.1)	14 (17.7)	9 (8.7)	28 (27.2)	
専門学校卒	7 (8.9)	4 (5.1)	12 (11.7)	7 (6.8)	
大学中退	—	1 (1.3)	—	—	
夫の転職					
あり		30 (38.0)		33 (32.0)	
なし		49 (62.0)		70 (68.0)	
夫の診断					夫の診断
あり		13 (16.5)		0 (0)	$\chi^2=13.628^{***}$
なし		66 (83.5)		103 (100)	

\*  $p<.05$ , \*\*\*  $p<.001$

の内訳は, ASD10名(アスペルガー症候群6名, 高機能自閉症1名が含まれる), 注意欠如・多動症(Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder; ADHD)2名, 適応障害1名であった。対照群には診断のある夫はいなかった。大人になってからASDと診断されるケースでは, 学校や職場で対人関係の問題が起こるようになり, それに伴い抑う

つなど様々な症状を呈して家族や上司に促されて精神科の受診に至るケースが多いとされる(広沢, 2015)。本研究でも, 診断のある夫は全員大人になってから精神科の受診に至って診断を受けている。また, 本研究では, 受診のきっかけとなったのは, 職場での対人関係の悩みや, 子どもの診断であった。

臨床群の別居率は, 12.7%という高い数値であった。臨床群では, 別居せざるを得ないほど家族機能に問題が生じていることや, 家族成員が疲弊していることが示唆される。

夫と知り合った場所については, 対照群では, 職場(23.3%)や学校(22.3%)が多い。対照群では, 学校や職場で共に過ごすことで十分に夫の人柄を知ってから結婚に踏み切っていることが示唆される。夫と知り合った時の夫に対する妻の人物評価に同僚や同級生からの評価も少なからず影響していることが考えられる。一方, 臨床群では, 学校以外のサークルなど趣味の場(16.5%)が多く, 同じ趣味・志向を持つことが夫選びの鍵になっていることが示唆される。その他という項目では自由記述してもらった内容の中に, 偶然に出会い比較的短期間で結婚に踏み切ったケースも含まれている。

妻の就業形態については, 臨床群では専業主婦(41.8%)が多く, 家計を夫の収入に頼っている妻が多いことが示唆される。また, 臨床群の夫には事業経営者(17.7%)が多く, 必然的に家業を手伝う妻(6.3%)も多い。以上から, 臨床群では, 家計を夫に頼っていたり, 夫婦が共に家業を営んでいたりするため, 対照群と比べて夫婦が経済的により分かちがたい状況にあることが示唆される。

### 3. ASDASQ 得点の分析結果

#### 1) ASDASQ 得点の平均値

回答者182人のASDASQ得点の平均値は, 2.76( $SD=3.20$ )であった。

#### 2) ASDASQ 得点と診断の有無による臨床群

の群分け

ASDASQのカットオフポイント(6点)と夫の診断の有無を基準とし, 臨床群( $N=79$ )を臨床高群と臨床低群の2群に分けた。夫のASDASQ得点が6点以上の45人に, 6点以下だが診断のある5人を加えた計50人(63.3%)を臨床高群とした。6点以下で且つ診断の無い29人(36.7%)を臨床低群とした。

#### 3) ASDASQ 得点の平均値の3群間比較

ASDASQの平均点を臨床高群, 臨床低群, 対照群の3群間で比較したところ有意差が認められた( $F(2, 179)=703.56, p<.001$ )(表3)。対照群の夫の中にも自閉的特性がある夫がいないわけではないことが示された。臨床高群のASDASQの平均点は,  $M=7.30$ ( $SD=1.169$ )と非常に高い。にもかかわらず, 実際に診断がある夫は13人(16.5%)にとどまっている。臨床高群では, 家庭内で妻が夫を見る時, 夫の自閉的特性が非常に高いにもかかわらず, ASDの診断に結び付いているケースが16.5%であることを示している。この数字が, 多いのか少ないのかについては議論が分かれるところであろう。また, 臨床群の夫の多くは, 大学卒業以上の学歴があり(46.8%), 就業している。臨床群の夫は, その自閉的特性にもかかわらず, 外の社会では適応していると考えられる。

表3 ASDASQ得点の平均値の分散分析の結果

	臨床高群 (N=50)	臨床低群 (N=29)	対照群 (N=103)	F 値	多重比較
平均値	7.30	3.48	.35	703.6 ***	臨床高 > 臨床低 > 対 ***
SD	1.169	1.184	.64		

\*\*\*  $p < .001$

### 4. 内的作業モデル尺度得点の分析結果

#### 1) 内的作業モデル尺度の因子分析

戸田(2007)は, 本尺度の使用方法として愛着型, 回避型, アンビバレント型の3つのタイプに分類する方法に加え, 18項目への回答を変量に3

因子解での因子分析を行い、各因子得点を算出する方法を提案している。本研究では、結婚生活において妻が夫の自閉的特性というストレスをどのように認識しているのかを探索的に検討するために因子分析を行う方法をとった。

因子負荷量が .400 以上であること、および因子に高い負荷量を示していることを基準に項目の取捨選択を行い、最尤法・Promax 回転による因子分析を 3 回繰り返した。その結果、第Ⅰ因子と第Ⅱ因子は、戸田 (1988) の「安定型」と「回避型」と同様の結果であった。しかし、第Ⅲ因子は理論上の「アンビバレント型」とは異なる因子であると考えられた。「ちょっとしたことで、すぐに自信をなくしてしまう (項目 6)」など、妻の自信の無さを示す内容の項目だけが残ったため、本研究では、第Ⅲ因子を「自信喪失型」と命名した。

## 2) 内的作業モデルの信頼性の検討

3 つの下位因子について Cronbach の  $\alpha$  係数を用いて信頼性の検討を行ったところ、安定型  $\alpha = .879$ 、回避型  $\alpha = .750$ 、自信喪失型  $\alpha = .786$  と 3 つの因子全てにおいて高い値を示した。

## 3) 3 因子得点の平均値の 3 群間比較

安定型、回避型、自信喪失型の平均値の 3 群間比較を行った。その結果、回避型 ( $F(2, 179) = 4.385, p < .05$ ) と自信喪失型 ( $F(2, 179) = 6.609, p < .001$ ) において有意差が認められた (表 4)。

臨床高群と対照群を比較すると、臨床高群では自信喪失型因子と回避型因子の得点は有意に高かった。しかし、安定型因子については、対照群と有意な差が見られなかった。臨床低群と対照群を比較すると、臨床低群では、自信喪失型因子の得点は有意に高かった。しかし、安定型因子と回避型因子については、有意な差が見られなかった。また、臨床高群と臨床低群の間には有意差は見られなかった。安定型の因子得点については、臨床

群と対照群の間に有意な差は見られず、ほぼ同じ値を示している。

表4 内的作業モデルの下位因子の平均値の分散分析の結果

		臨床高群 (N=50)	臨床群 (N=29)	対照群 (N=103)	F 値	多重比較
安定型	平均値	3.84	3.68	3.88	.617	
	SD	.95	.68	.85		
自信喪失型	平均値	3.69	3.64	3.16	6.61**	臨高>対**
	SD	1.15	.79	.88		臨低>対*
回避型	平均値	3.68	3.61	3.32	4.39*	
	SD	.98	.69	.68		臨高>対*

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

自信喪失型という因子得点の高さは何を意味しているのだろうか。内的作業モデルが成人の愛着スタイルを示すものであり、この自信喪失型という因子も発達の段階で獲得されたと考えることが妥当であろう。換言すれば、発達の段階において、親との関係性の中で自分に自信が持てなくなるような出来事があり、その自信のなさが現在の夫婦関係に影響を及ぼしていることが示唆される。

## 5. 役割行動遂行尺度の平均点の分散分析の結果

役割行動遂行尺度には、支援性、自律性、娛樂性、類似性、力動性の 5 つの下位尺度がある。値が高いほど期待される役割行動を夫が遂行していると妻が評価していることを表す。

5 つの下位尺度の平均値を 3 群間で比較したと

表5 役割行動遂行尺度の下位因子の平均値の分散分析の結果

		臨床高群 (N=50)	臨床低群 (N=29)	対照群 (N=103)	F 値	多重比較
支援性	平均値	3.42	3.99	6.54	79.858***	対>臨高≒臨低***
	SD	1.58	1.66	1.49		
自律性	平均値	3.76	4.52	6.52	63.770***	対>臨高≒臨低***
	SD	1.77	1.53	1.32		
娛樂性	平均値	2.90	3.69	6.26	75.412***	対>臨高≒臨低***
	SD	1.63	1.84	1.69		
類似性	平均値	2.83	3.40	5.58	59.681***	対>臨高≒臨低***
	SD	1.53	1.36	1.64		
力動性	平均値	4.69	5.37	6.73	32.223***	対>臨高≒臨低***
	SD	1.75	1.48	1.43		

\* $p < .05$ , \* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

ころ、全てにおいて有意差が認められた(表5)。

対照群の妻の夫に期待する支援性、自立性、娯楽性、類似性、力動性については、臨床群と比較して有意に高い値であるという結果が示された

(順に、 $F(3, 179) = 79.858, p < .001$ ;  $F(3, 179) = 63.770, p < .001$ ;  $F(3, 179) = 75.412, p < .001$ ;  $F(3, 179) = 59.681, p < .001$ ;  $F(3, 179) = 32.223, p < .001$ )。対照群と比較して、臨床高群と臨床低群の夫に期待する役割行動遂行の評価は有意に低いことが示された。特に、臨床高群の娯楽性の平均値が低い( $M = 2.90, SD = 1.63$ )ことが注目される。娯楽性の質問項目内容は、「場の雰囲気なごませるような話をする」、「ジョークなど、気楽に楽しめる話をする」など5項目である。以上から、臨床高群では、夫婦間で気楽に楽しめる会話が少ないという事が示唆される。

## 6. 関係効力感尺度の平均点の分散分析の結果

関係効力感尺度は、合計得点が高いほど夫婦の関係についてコントロール出来ていると感じていることを表す。関係効力感の平均値を3群間で比較したところ、3群間に有意な差が認められた( $F(3, 179) = 95.945, p < .001$ ) (表6)。対照群と比較して、臨床群では夫婦関係をコントロール出来ていないと妻が感じていることが示された。

なお、関係効力感とSMATの間の相関については、臨床高群、臨床低群、対照群の3群で高い正の相関が見られた(順に、 $r = .764, p < .01$ ;  $r = .674, p < .01$ ;  $r = .725, p < .01$ )。夫婦の関係についてコントロール出来ていると感じることと、結婚生活満足感の間に関連があることは自然なことであろう。

表6 関係効力感尺度の平均値の分散分析の結果

	臨床高群 (N=50)	臨床低群 (N=29)	対照群 (N=103)	F値	多重比較
平均値	15.96	18.52	33.89	95.945 ***	対>臨床高≒臨床低***
SD	7.764	8.720	8.328		

\* $p < .05$ , \* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## 7. 関係楽観性尺度平均値の分散分析結果

関係楽観性尺度は結合予期と分離予期の2つの下位尺度から成る。結合予期は得点が高いほど、妻が夫婦の将来に楽観的な見通しを持っていることを示し、分離予期は得点が高いほど悲観的な見通しを持っていることを示す。なお、結合予期と分離予期の間には、高い負の相関が認められた( $r = -.661, p < .001$ )。

1) 結合予期と分離予期の平均値の3群間比較  
結合予期と分離予期の平均値を3群間で比較したところ有意な差が認められた( $F(3, 179) = 65.308, p < .001$ ;  $F(3, 179) = 30.850, p < .001$ ) (表7)。対照群と比較して、臨床群では夫婦の将来に「お互いの求めることに深刻なズレが生じてくるだろう」といった悲観的な見通しを持っていることを示す。

表7 関係楽観性尺度の下位尺度の平均値の分散分析の結果

	臨床高群 (N=50)	臨床低群 (N=29)	対照群 (N=103)	F値	多重比較
結合予期 平均値	1.86	2.18	3.55	65.308 ***	対>臨床高≒臨床低***
SD	1.006	.946	.879		
分離予期 平均値	3.54	3.35	2.43	30.850 ***	臨床高≒臨床低>対***
SD	1.002	1.006	.803		

\* $p < .05$ , \* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

## 8. SMAT

SMATの平均値を3群間で比較したところ、3群間に有意な差が認められた( $F(3, 179) = 90.101, p < .001$ ) (表8)。

表8 SMATの平均値の分散分析の結果

	臨床高群 (N=50)	臨床低群 (N=29)	対照群 (N=103)	F値	多重比較
平均値	32.00	34.86	89.24	90.101 ***	比対>臨床高≒臨床低***
SD	29.271	24.213	27.956		

\* $p < .05$ , \* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

臨床群の妻の結婚生活満足感は、対照群の妻のそれと比較して有意に低いことが示された。これは、対照群の妻と比較して、臨床群の妻は結婚生活に不満を持っていることを示している。なお、夫の自閉的特性と妻の結婚生活満足感の間に負の



相関関係が見られた ( $r = -.468, p < .01$ )。これは、夫の自閉的特性と結婚生活満足感の間には関連があることを示している。

### 9. 妻の結婚生活満足感を予測する変数の分析

最後に、3群についてそれぞれ、ASDASQ、内的作業モデル尺度、役割行動遂行尺度、関係効力感尺度、関係楽観性尺度を独立変数、結婚生活満足感を従属変数としステップワイズ法を用いた重回帰分析を行った (表9)。

表9 SMATを従属変数とする重回帰分析の結果

説明変数	臨床高群 (N=50)			臨床低群 (N=29)			対照群 (N=103)		
	B	SEB	$\beta$	B	SEB	$\beta$	B	SEB	$\beta$
結合予期	13.50	2.855	.46***	14.2	3.289	.56***	12.68	2.856	.38***
分離予期							-6.25	2.402	-.18**
関係効力感									
支援性	7.26	2.147	.39**				8.454	1.648	.41***
類似性				6.73	2.287	.38**			
力動性	3.09	1.494	.19*						
Adj. $R^2$	.74***			.65***			.71***		

注)  $\beta$  : 標準偏回帰係数

\* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

#### 1) 臨床高群

臨床高群では、結合予期、支援性、力動性の3つの要因が、妻の結婚生活満足感に正の影響を与えていることが示された (結合予期  $\beta = .46, p < .001$ ; 支援性  $\beta = .39, p < .01$ ; 力動性  $\beta = .19, p < .05$ ;  $R^2 = .74, p < .001$ )。結合予期は「お互いの気持ち (愛情) は今と同じくらい強くあり続けるだろう」、支援性は「悩み事や愚痴などを聞いて理解を示す」、力動性は「自分なりに信念を持って行動する」や「自分で納得できるまで真剣に物事に取り組む」などの項目から構成されている概念である。重回帰分析の結果から、臨床高群では、妻の結合予期と夫の支援性と力動性が高くなれば、結婚生活満足感が高くなるが、そうでない場合は結婚生活満足感が低くなることが示唆される。したがって、臨床高群では、妻の結婚満足感を高めるために、何よりも夫の支援性と力動性を高めることが必要になる。

#### 2) 臨床低群

臨床低群では、結合予期と類似性の2つの要因が、妻の結婚生活満足感に正の影響を与えていることが示された (結合予期  $\beta = .56, p < .001$ ; 類似性  $\beta = .38, p < .01, R^2 = .65, p < .001$ )。類似性とは、夫が自分と「似たような考え方や感じ方をする」ことなどを示す。この結果は、臨床低群においては、結合予期と類似性が高くなると、結婚生活満足感が高くなり、逆に、それらが低くなると結婚生活満足感が低くなるということを示している。なお、臨床低群では、夫の自閉的特性と妻の結婚生活満足感の間に有意な負の相関関係は認められなかった。

#### 3) 対照群

対照群では、結合予期 ( $\beta = .38, p < .001$ ) と支援性 ( $\beta = .41, p < .001$ ) が妻の結婚生活満足感に正の影響を、分離予期 ( $\beta = -.18, p < .01$ ) は妻の結婚生活満足感に負の影響を与えていることが示された。3つの変数による説明率は  $R^2 = .71 (p < .001)$  であった。すなわち、対照群では、夫の支援性と結合予期が高くなれば結婚生活満足感が高くなる。そして分離予期が高まれば結婚生活満足感が低下することを意味する。逆に、夫の支援性と結合予期が低くなると、結婚生活満足感も低くなる。そして、分離予期が低くなると結婚生活満足感が高くなると考えられる。なお、対照群においては、夫の自閉的特性と妻の結婚生活満足感の間に有意な負の相関関係は認められなかった。

## IV 考察

父親に自閉的特性のある家族では、妻は、母としての役割と夫をサポートする2つの役割を担うことになる。したがって、妻の心身の健康の維持は、家族全員の心理社会的問題と関わる重要な問題である。本研究では、結婚生活の時間の経過とストレスとなる出来事の累積により、妻がそれまでの生活様式では対処できないような事態に

陥ることを「家族の危機」と捉え、自閉的特性のある夫を持つ妻の結婚生活満足感に影響を与える要因を一般の既婚者の妻と比較・検討ながら探索的に検討することを目的とした。

夫の自閉的特性が高い臨床高群では、夫の自閉的特性と妻の結婚生活満足感の間に因果関係は認められなかったが、中程度の負の相関が認められている ( $r=-.468$ ,  $p<.01$ )。また、臨床高群では、対照群と比較して、結婚生活満足感が低く、別居率も高いことから、夫の自閉的特性が高い場合は、夫の自閉的特性は「家族の危機」につながるストレスであることが示唆される。そして、夫の支援性と力動性は、危機に対応する重要な「家族の資源」であることが示唆される。

夫の支援性を家族の資源と捉えるという点においては、臨床高群も対照群も同じであった。つまり、自閉的特性の高い夫を持つ妻も、一般既婚者女性も、夫の支援性を家族の資源と捉えるという点においては、同じような認知の仕方や意味付けをしていると考えられる。両者の違いは、分離予期というストレスに対処する認知の仕方や意味付けが、臨床高群では結婚生活満足感に正に影響を与える要因として抽出されなかったことである。その背景要因として、臨床高群では、専業主婦や家業手伝いが多く、経済的に夫婦不可分な状況にあり、容易に別居や離婚に踏み切ることが難しいことが考えられる。また、夫婦の属性データから、臨床群の別居率が対照群と比較して有意に高いことが示されており、臨床群の「家族の危機」は非常に深刻なレベルであることが示唆される。

対人関係の親密化に伴い当事者間の相互依存レベルが高まるが、相手に対して自らの行為の及ぼす影響力が増していくにしたがい葛藤の生起可能性も高くなるとされ (Braiker et al., 1979), 結婚生活が長くなるにつれ、自閉的特性のある夫を持つ妻を感じる夫婦間の葛藤が増えていくと考えられる。つまり、夫の自閉的特性が高い場合、結婚年数が長くなると「家族の危機」が生じるリス

クがさらに高くなると考えられる。

宮尾 (2012) は、複雑な遺伝と環境の複雑な相互関連を踏まえた視点から、家族療法や夫婦カウンセリングを行うと、それまで個人的なカウンセリングと薬物治療では得られなかった改善を経験することもまれではないと述べている。こうした知見を踏まえ、夫の自閉的特性が高い場合、「家族の危機」を回避するために、教育、社会、心理、医療の密接なネットワークを構築し、全ての家族の構成員をサポートしていくことが求められる。

その際、自閉的特性のある夫に診断をつけるかどうかということよりも、自閉的特性のある夫が家庭内で適応的にふるまえるように家庭内の環境調整や、エビデンスに基づいた社会性やコミュニケーションスキルを高めるトレーニングを優先的に提供されることが必要だと考えられる。なぜなら、妻が一方的に夫を支援する役割を担うことが「家族の危機」を回避するために有効な手段だとは考えられないからである。自閉的特性のある夫からの支援性が高まらなければ、妻の結婚生活満足感が高まらないことが示されているからである。そのため、夫と妻がどんなことに困っているのかを専門家が丁寧に聴取した上で、適切な支援が必要となる。

以上から、支援者は、それぞれの妻が直面している「家族の危機」がどのような機序で発生しているのかを丁寧にアセスメントすることが必要であると考えられる。なお、本研究の臨床群の調査対象者は、メンタルヘルスの問題を抱え、支援を求めて自助会に参加している。言うまでもないことであるが、自閉的特性のある夫を持つ妻の中にも幸福な結婚生活を送っている人たちが大勢いるであろうことを指摘しておく。

## V 今後の課題

本研究では、夫の自閉的特性がそれほど高くない臨床低群において、夫の自閉的特性が「家族の危機」につながるストレスになっているのか

どうかについては明確にはわからなかった。今後、どのような要因が「家族の危機」につながるストレスになっているかさらに検討していく必要がある。また、成人の愛着を測定する内的作業モデル尺度の因子分析から、自信喪失型という因子が得られ、自閉的特性のある夫を持つ妻は、発達の段階で愛着対象との間で何らかの自信を喪失させるような体験をしていることが示唆された。今後は、妻の成育歴や性格、および特性と、それらの要因と現在の結婚生活において妻が抱えているメンタルヘルスの問題との関連を検討していくことが必要と考えられる。

<付記> 本稿は、平成 27 年度お茶の水女子大学生活科学部人間生活学科発達臨床心理学講座在籍時に執筆した卒業論文の内容に加筆・修正したものです。ご指導賜りました 埴 倫子教授に熱く御礼申し上げます。

## 文献

- 浅野 良輔 (2009) . 親密な対人関係に関する楽観性効力感尺度の邦訳と信頼性・妥当性の検討, 対人社会心理学研究, 9, 121-130.
- 新井 正之 (2017) . パートナーがアスペルガー？カサンドラ症候群を知ろう, 朝日新聞デジタル. [https://www.asahi.com/articles/ASKCY5631KCYUBQU014.html?iref=pc\\_ss\\_date](https://www.asahi.com/articles/ASKCY5631KCYUBQU014.html?iref=pc_ss_date) (2017 年 11 月 29 日閲覧)
- Braiker, H.B. & Kelley, H.H. (1979) . Conflict in the development of close relationships. In R. L. Burgess, & T. L. Huston. (Eds.) . *Social exchange in developing relationships*. Academic Press. 135-168.
- Erickson, R.J. (1993). Reconceptualizing Family Work: The Effect of Emotion Work on Perceptions of Marital Quality, *Journal of Marriage and Family*, 55, (4), 888-900.
- Feeney, J.A., & Noller, P. (1990). Adult Attachment Style as Predictor of Adult Romantic Relationships, *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, (4), 644-663.
- Fraley, R., Chris Shaver, & Phillip R. Shaver (2000). Adult romantic attachment: Theoretical developments, emerging controversies, and unanswered questions, *Review of General Psychology*, 4, (2), 132-154.
- 橋本 俊顕 (2014) . 自閉症スペクトラム障害, 診断と評価, 発達障害—基礎と臨床—, 有馬 正高 (監修), 有馬 正高・熊谷 公明・加我 牧子 (編集), 日本文化社, 2, (2), 14-54.
- Hill, R. (1958). Generic features of families under stress, *Social Casework*, 39, 139-150.
- Howlin, P., & Asgharian, A. (1999). The diagnosis of autism and Asperger syndrome: findings from a survey of 770 families, *Developmental Medicine and Child Neurology*, 41, 834-839.
- 伊藤 裕子・池田 政子・川浦 康至 (1999) . 既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的影響, 心理学研究, 70, 1, 17-23.
- 稲葉 昭英 (1999) . 有配偶者女性のディストレスの構造, 石原 邦雄 (編), 妻達の生活ストレスとサポート関係—家族・職業・ネットワーク—, 東京都立大学都市研究所, 87-119.
- 岩満 優美 (2014) . ストレス対処, 山内 弘継・橋本 幸 (監修), 岡市 廣成・鈴木 直人 (編) 心理学概論 (2014) . ナカニシヤ出版, 11, (2), 322-328.
- 神尾 洋子 (2012) . 精神科医療で出会う自閉症スペクトラム障害のあるおとなたち, 神尾 洋子 (編) 成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル, (1), 2-14, 医学書院.
- 甘露寺 順子 (2012) . 自閉症スペクトラム者の夫婦関係の検討: 夫婦間コミュニケーションと夫婦関係満足度に着目して, 白百合女子大学発達臨床センター紀要, 15, 62-71.
- Lau, W., & Peterson, C. C. (2011). Adults and children with Asperger syndrome: Exploring adult attachment style, marital satisfaction and satisfaction with parenthood, *Research in Autism Spectrum Disorders*, 5, (1), 392-399.

- Locke, H.J. & Wallace, K. M. (1959). Short Marital-Adjustment and Prediction Tests: Their Reliability and Validity, *Marriage and Family Living*, 21, 251-255.
- McCubbin, H. I., & Patterson, J. M., (1983). The family stress process: the double ABCX model of adjustment and adaptation. H. I. McCubbin, M. B. Sussman, & J. M. Patterson (Eds.), *Social stress and the family: Advances and development in family stress theory and research*, 7-37. New York: Haworth Press.
- 宮尾 益知 (2012). 家族への対応, 神尾 洋子 (編) 成人期の自閉症スペクトラム診療実践マニュアル, (10), 65-70, 医学書院.
- 森岡 清美・望月 嵩 (1983). 新しい家族社会学 四訂版, 培風館.
- Nylander L., & Gillberg C. (2001). Screening for autism spectrum disorders in adult psychiatric patients: a preliminary report, *Acta Psychiatrica Scandinavica*, 103, (6), 428-34.
- Renty, J., & Roeyers, H. (2007). Individual and Marital Adaptation in Men with Autism Spectrum Disorder and their Spouses: The Role of Social Support and Coping Strategies, *The Journal of Autism and Developmental Disorders*, 37, 1247-1255.
- 下斗米 淳 (2000). 友人関係の親密化過程における満足・不満足感及び葛藤の顕在化に関する研究—役割期待と遂行とのズレからの検討—, 実験社会心理学研究, 41, 1-15.
- 高橋 三郎・大野 裕 (監訳), 染谷 俊幸・神庭 重信・尾崎紀夫・三村 将・村井 俊哉 (訳) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き, 日本語版用語監修, 日本精神神経学会, 医学書院. (American Psychiatric Association: APA (2013). Desk Reference to the Diagnostic criteria from DSM-5.)
- Taylor, S. E., & Brown, J.D. (1988). Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health, *Psychological Bulletin*, 103, 193-210.
- 戸田 弘二 (1988). 青年期後期における基本的対人態度と愛着スタイル: 作業仮説 (working models) からの検討, 日本心理学会第 52 回大会発表論文集, 27.
- 戸田 弘二 (1991). Internal Working Models 研究の展望, 北海道大学教育学部紀要, *The Annual Reports on Educational Science*, 55, 133-143.
- 戸田 弘二 (2007). 内的作業モデル尺度, 堀洋道 (監修), 吉田 富二雄 (編), 心理測定尺度集 II 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値観〉, サイエンス社, 109-117.